

# 日展ニュース

No. 176

<http://www.nitten.or.jp/>

令和2年9月28日発行

編集兼発行人 土屋 禮一

## 改組 新 第7回日展に向かって



驟雨来る高原 川崎春彦



## 「改組新第七回日展を開催するにあたって」

日展理事長 奥田小由女

改組新第七回日展は、本来ならば華やかに、オリンピック・パラリンピックの開かれる年の秋に開催予定でありましたが、突然の思いもかけない新型コロナウイルス

イルスの世界的感染拡大により、オリンピックは延期となり、多くの美術公募展の延期や中止が次々に発表されるなか、日展はどのようにするのか注目されるどころとなりました。

コロナの終息がなかなか難しい状況下で、我々日展作家は社会に対してどうあるべきか、今こそ日展はコロナで疲弊した社会に対し「美」を届け、人々の心に寄り添える美術・芸術の力を発信すべき

だとの思いから、日展五科が力を合わせ助け合って、休まず展覧会を開催する運びとなりました。

密を避けるため、残念ながら、恒例の開会式、オープニングパーティ、各科の懇親会、「日展の日」、講演会等々を中止と致し、感染症対策に努め、生命を守り抜く懸命の努力を致します。

第七回日展が作品本位の五科揃った美術公募展として歴史に残る素晴らしい展覧会となる事を信じ祈念致します。

皆様の御理解と御協力を心より、お願い申し上げます。

# 改組新 第七回日本美術展覧会実施内容

会 期 令和2年10月30日（金）～令和2年11月22日（日）

観覧時間 午前10時～午後6時（入場は午後5時30分まで）

休館日 11月4日（水）・10日（火）・17日（火）

入場料 ○当日券

（税込）

○団体券・前売券

一般 一、三〇〇円

高校・大学生 八〇〇円

一、一〇〇円

高校・大学生 六〇〇円

※団体券は20名以上。20枚購入につき招待券1枚進呈。

小・中学生は無料。

会 場 国立新美術館 東京都港区六本木七―二―二

◎新型コロナウイルス感染症対策のため、入場制限を行う場合がございますので、あらかじめご了承ください。

新しい時代 日本の美

# 日展

改組新 第7回 日本美術展覧会  
日本画・洋画・彫刻・工芸美術・書

2020年  
10月30日（金）～11月22日（日） 休館日 11月4日（水）・10日（火）・17日（火）

国立新美術館

◆主催：公益社団法人日展 ◆後援：文化庁／東京都 ◆観覧時間：午前10時～午後6時（入場は午後5時30分まで）  
◆入場料：一般 1,300円（1,100円）／高・大学生 800円（600円）※（小学生は無料、中学生は半額、高校生は半額）※（小学生は無料、中学生は半額、高校生は半額）※（小学生は無料、中学生は半額、高校生は半額）※

※チケットやイベントなど最新の開催情報は「日展ウェブサイト」：<https://nitten.or.jp/> でご確認ください。

The Japan Fine Arts Exhibition

改組新 第七回日展 会期中のイベントのお知らせ

## 《作家の声を聴くプログラム》

日展公式サイトでご覧になれます。日展会場でも放映。詳しくは日展公式サイトで。

## ★ 今年の日展の見どころ

ゲストと今年の日展会場を巡ります。（ゲストは公式サイトで発表）

★「作品の解説」各部門（日本画・洋画・彫刻・工芸美術・書）  
受賞作品を中心に解説します。

## ★「作家インタビューダイジェスト」

アトリエ等で日展作家にインタビューした様子をダイジェストで放映します。

## 《わくわくワークショップ―特別編―》

「手紙を書こう！」

今回は、いつでも参加していただけるイベントとして、「手紙を書こう！」を実施いたします。

作品をみて発見したこと、不思議なこと、聞いてみたいことを「言葉」にしてみよう！

## ●参加資格 小・中・高校生

## ●参加の方法

↓ 日展会場で作品をみて、好きな作品を選ぶ

↓ 「手紙を書こう！」コーナーで、その作品の作家に手紙を書く

（質問、感想なんでもOK！）

## ★日展会場の専用ポストに投函すれば、特製缶バッチプレゼント！

※公式サイトでも受け付けます。（缶バッチプレゼントは会場のみ）

↓ 作家から返事が届きます

第七回日展では、新型コロナウイルスの感染拡大の予防措置として、左記のイベント、ワークショップを中止いたします。

●らくらく鑑賞会 ●ミニ解説会 ●グループ解説 ●「触れる鑑賞」プロジェクト

尚、今後の状況によっては変更が生じる可能性もございますので、最新の情報は、公式サイトで告知させていただきます。

# 改組新第七回日展審査員・係

## 第四科（工芸美術）審査員 一九名

（外部審査員）

MOA美術館館長  
箱根美術館館長  
東京藝術大学美術館教授  
内田 篤興  
黒川 廣子

### 第一科（日本画）

岡村倫行 河村源三  
成田 環 ◎米倉正美  
北村恵美子 澤野慎平  
佐々木淳一 佐藤俊介  
山田 毅 米田 実

### 第二科（洋画）

◎桑原富一 池田清明  
松田 茂 長谷川 仂  
片岡世喜 丸山 勉  
鍵主恭夫 木原和敏  
前田 潤 田中里奈

### 第三科（彫刻）

◎山田朝彦 上田久利  
谷口淳一 辻畑隆子  
石崎義弘 小野啓亘  
大丸 敏 一鉄田 徹  
井上周一郎 上田ふみ  
森矢真人 白石恵里

### 第四科（工芸美術）

◎藤田 仁 武腰一憲  
内藤英治 安藤 工  
山崎輝子 西片 正  
小田謙二 横山喜八郎  
古瀬政弘 木谷陽子

### 第五科（書）

◎土橋靖子 有岡郊崖  
木村通子 鬼頭翔雲  
内藤望山 永守蒼穹  
吉川美恵子 和中簡堂  
竹内勢雲 寺岡棠舟

## 改組新第七回 日展《係》 （◎印＝係主任）

## 改組新第七回 日展審査員 九四名

審査員長（理事長）奥田小由女

## 第一科（日本画）審査員 一八名

（外部審査員）

平塚市美術館特別館長  
埼玉県立近代美術館館長  
多摩美術大学長  
草薙奈津子  
建昌 哲

（理事）  
佐藤 哲

（会 員）  
天野富美男 池田 清明  
池田 良則 桑原 富一  
長谷川 仂 濱本 久雄  
松田 茂 丸山 勉  
遠藤 原三 片岡 世喜  
木原 和敏 鍵主 恭夫  
大淵 繁樹 西田 陽二  
田中 里奈 前田 潤

（準会員）

（副理事長）  
土屋 禮一  
（理事）  
渡辺 信喜  
（会 員）  
岡村 倫行 河村 源三  
佐々木 曜 成田 環  
米倉 正美 加藤 晋  
北村恵美子 澤野 慎平  
長谷川雅也 佐藤 俊介  
佐々木淳一 山田 毅  
安田 敦夫  
米田 実

## 第三科（彫刻）審査員 一九名

（外部審査員）

美術評論家  
NHKエンタープライズ  
エンセクティブ・プロデューサー  
武田 厚  
山下 茂

（副理事長）  
神戸 峰男  
（理事）  
山田 朝彦  
（会 員）  
上田 久利 熊谷喜美子  
谷口 淳一 辻畑 隆子  
安藤 孝洋 石崎 義弘  
小野 啓亘 田丸 稔  
大丸 敏 一鉄田 徹  
吉岡 徹 井上周一郎 上田 ふみ  
白石 恵里 森矢真人

## 第二科（洋画）審査員 一九名

（外部審査員）

平塚市美術館館長代理  
武蔵野美術大学客員教授  
東京都美術館館長  
土方 明司  
真室 佳武

（準会員）

（外部審査員）  
センチュリーミュージアム館長  
台東区立書道博物館主任研究員  
（理事）  
新井 光風 井 茂 圭洞  
星 弘道  
（監事）  
土橋 靖子  
（会 員）  
有岡 郊崖 井上 清雅  
木村 通子 鬼頭 翔雲  
堂本 雅人 内藤 望山  
永守 蒼穹 山根 互清  
吉川美恵子 和中 簡堂  
尾西 正成 竹内 勢雲  
寺岡 棠舟

改組新 第7回日展行事日程(予定)  
 係会関係

10月18日(日) 午後3時

○入選者・特選受賞者発表  
 (洋画・工芸美術)

10月19日(月) 午後3時

○入選者・特選受賞者発表  
 (書)

10月22日(木) 午後3時

○入選者・特選受賞者発表  
 (日本画・彫刻)

10月29日(木)

○出陳者内覧  
 実施内容検討中

10月30日(金)

○改組新 第7回日展開会  
 ○大臣賞等受賞者発表(予定)

11月12日(木)

○改組新 第7回日展授賞式  
 (国立新美術館講堂)

11月22日(日)

○改組新 第7回日展閉会

※出陳者懇親会・開会式は、新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、本年度開催なし

改組新 第7回日展前売券販売店のご案内  
 (10月1日より販売)

プレイガイド

チケットぴあ・CNプレイガイド・ローソンチケット・ファミリーマート店内Famiポート、他  
 デパート(友の会)  
 高島屋(大宮店)・東武・丸広、他  
 カルチャーセンター  
 読売・日本テレビ文化センター・ヨークカルチャーセンター、他  
 他に画材店・画廊・書道用品店などでも取り扱いがあります。

日展公式サイトでも販売しております。

《改組新 第7回日展チケット情報》

前売ペアチケット

通常、一般一枚一、一〇〇円(当日一、三〇〇円)の前売券を、ペアでご購入の場合、二、〇〇〇円に。通常の前売券より二〇〇円お得です。

※前売コンピュータチケット・日展公式サイトのみ

トワイライトチケット



時間限定の入場券  
 観覧時間 午後4時～6時  
 一般一枚 四〇〇円  
 高・大学生一枚 三〇〇円  
 ※会場窓口のみ販売

夏休み一日ART体験

ワンデイアート  
 第16回 Oneday Art レポート

新型コロナウイルス感染症による自粛期間の影響で、今年は子供たちの夏休みも短縮されてしまいました。また、感染症対策のため、例年のような開催は出来ないと判断しましたが、開催を心待ちにして下さる皆さんの声になんとか応えたいと、担当作家が知恵を絞り、少人数で、「第16回 Oneday Art」が開催されました。連日の猛暑の中、限られた時間でしたが、集中して仕上げた作品はいずれも力作ばかり。

今回は、大人と子供、あわせて57名の参加者。作品展は公式サイトで行い、共同制作は、パブリックスペースや国立新美術館の日展会場で展示を予定しています。

☆今回制作した作品は、日展のホームページ(こども日展ページ)でご紹介します。

《指導作家》

8月1日 工芸美術(陶)

林 香君 南雲龍比古 福富 信  
 村田真樹  
 (サポーター) 高橋和則 村越郁夫

8月2日 彫刻

中原篤徳 野原昌代  
 (サポーター) 吉岡 徹 寺山三佳  
 廣川政和

8月8日 書

(オブザーバー) 山田朝彦  
 井上清雅 師田久子 綿引滔天  
 高木聖雨  
 (サポーター) 尾花太虚 角田大壤  
 斉藤真澄 滑田耀齋 松浦龍坡

8月9日 洋画

田辺知治 大友義博 茅野吉孝

8月15日 日本画

岩田壮平 亀山祐介 川田恭子  
 能島浜江  
 (サポーター) 青鹿未奈 井上恵理

「ご協力いただきました」

株式会社吉祥、株式会社呉竹、株式会社ケーエス、株式会社東海丸二陶芸、株式会社墨運堂





## 特別寄稿

### 藤椅子の父

中西 進

少年が少しずつ世間を知っていく過程には、「父の部屋」があるのではないか。

そこにはいかめしい全集やむずかしそうな哲学の本が並んでいる。留守を見はからつてもぐり込んで、子どもはいつしか大人の世間のまぶしさに、目覚めていくのだと思う。

わたしにも思い出がある。何度か、戸のあいた部屋の中に父がゆったりと藤椅子に坐りながら、大きな冊子を膝の上に広げているのが見えた。入ってみると冊子は新聞を広げた程にも大きい写真集で、表紙には「文展」とあった。

今日の日展の前身、文部省美術展覧会の作品集を毎年買い求めては、休日の日を楽しむのが父の日課だったのである。

そのせいか、わたしも大学生以来、よく上野の都の美術館に通った。もう文展は日展と名をかえていたが、「上野にいく」といえば、日展を見に行くことを意味した。

父がしていたように。

図録も買った。そう思い出して今回書庫で探すと、まず第三十八回日展の作品集が見つかった。

三十八回の日展といえば、これが最後の上野における展覧会だから、記念すべき展覧会であった。

冊子は、この折に出合った作品を思い出させてくれた。冒頭の日本画には高山辰雄さんらが並んでいる。偶然お会いした折、高山さんは



三谷吾一《静日》(第38回日展出品作)

「想が枯れると飛鳥にいきます」と告げてくれたこともあった。

彫刻の部では川崎普照さんの「寛ぎ」と出合ったことになる。重量感がありながら鋭い、みごとな作だ。彼とわたしは、高校が同窓である。

そして漆の三谷吾一さんの作品は「静日」(挿図)。氏は日本の深層を、こよなく愛した。ここでも今よりもっと自由で豊かな日本の森林や深海、さらにはもっと生きいきとしていた人間を、まるで縄文時代のように見せてくれた。

氏のこの日本賛歌に感動して、生前、わたしが理事長をつとめる法人の「日本学賞」を贈らせて頂いた。

その折、氏を推薦してくれたのが三田村有純さんで、氏は三十八回の日展に「天を抱く処」という作品を出品している。

このようにわたしは日展を毎年楽しんできたが、日展はなぜ、多くの日本人を楽しませてくれるのだろう。

日展が百年をこえる伝統をもつ、その權威のゆえか。現在は法人の日展主催だが、それ以前は永く官営だったことによるのか。

いや、芸術の偉大さは權威や格式などを不要とするところにある。それらにおもねればもう芸術ではない。

だからわたしは、日展作品の魅力は安定性に

あるのではないかと思う。

反伝統や挑発を拒否すれば、日展は陳腐に陥るだろうが、それが単なる試みである時には、価値とは認めない。それらが伝統や正當性に輝きを付加する域に達して始めて、すぐれた芸術になるという、この安定性をこそ、日展は価値とするのではないか。

日展にいく時は、身構える必要がない。生活の一部であるように「上野にいく」という感覚は、このような安定性から生まれるのだろう。

日本人にとって日展は、贅沢な「秋の食事」なのかもしれない。もつとも、わたしにはもう一つ理由がある。

藤椅子の父にも会える。

中西 進 (なかにし すすむ)

一九二九年東京都生まれ。東京大学大学院修了。文学博士。



筑波大学教授、国際日本文化研究センター教授などを経て、大阪女子大学学長、帝塚山学院理事長

・学院長、京都市立芸術大学学長、日本学術会議会員、日本比較文学会会長、全国大学国語文学会会長、東アジア比較文化国際会議会長、日本ペンクラブ副会長ほか。インド・ナールンダ大学賢人会議メンバー・理事をつとめる。日本学士院賞受賞、文化功労者、瑞宝重光章受章、文化勲章受章。

現在、高志の国文学館館長。

中西進著作集(全三十六巻)ほか、著書多数。

## 日展の第五科に感じること

名児耶 明

日展といえば、学生時代から話題になることも多く毎年展示を見に行っていた。当時の名だたる書家が出品する部屋を中心に、わくわくしながら見た記憶がある。その他の分野についても同様であった。その後、五島美術館に勤務することになり、古美術に接する生活が中心になったが、書の優品を多く所蔵する美術館でもあり、現代につながる書の歴史を見るため、個人的な書の研究としても見に行くことに努めた。

書の部門は、日展の中では文展時代からの他の分野と異なり、四十年ほど遅れて参加している。昭和二十三年、第五科と分類されて始まっている。いわゆる団塊の世代の生まれた時代で、自分もその中の一人となる。したがって、その歴史は自分の人生と重なるが、二〇〇七年日展一〇〇年の記念の展示の際に、日本経済新聞社の展覧会担当者からの依頼で、書作品の選定に関わることとなった。その折一文を図録に寄せている。その時にまさに日展における現代書の変遷を改めて知ることができた。展覧会に行くだけでは分からなかったことが見えてきたのである。過去の日展作家の作品を、時代を通して見ていくと現代の作品の傾向が見えてきたのだが、そこで感じたことは、今の作品を見ているだけでは感じられない作品のもつ新しさや時代の傾向を、数十年単位で時代を追ってみることで理解が可能になることである。美術に関わるものならば当たり前のことと言われていることであっても、時に実感することは必要なのであろう。展覧会は続けていくことが重要でそこに意味があると強く感じたのである。

そうした経験から、自分が学んできた日本の書道史上の作品と日展の歴史の中の書の七十年間の作品をみて、その印象を述べてみようと思う。まず、七十年間での大きな作品の傾向が見えてくる。その一つは、書の大きな団体ごとの流行と言って良いのかわからないが、まわりから評判になる作品が出現すると、それに似た作品がその団体の中で多くなっていると感じられる。つまり、大きなグループに属する作家たちは、良い作品が生まれるとその仲間の影響をうけてさらにそれ以上のものを作ろうとするのであろう。それがいくつもあることで、展覧会は活気づいているように思う。漢字も仮名もいわゆる漢字仮名まじりの作品等すべてに感じられる。こうした傾向が出てくるのは日展の他の分野では少ないのかも知れないが、技術向上に関してははきわめて有効なことで、より良い作品作りにつながると思う。

二つ目の印象は、分野で異なるが、漢字は明治以来、より中国的な作品を求めているように、篆書や隸書、行草体が中心で、それが日展作品に反映していると思われる。ただし、それらは私の目から見ると、形式は中国的でも、線質や造形、そこに込められた作家の表現は、結局日本人の感性が働いているように見え、本質は日本的といえると思う。

また、仮名についてみると、平安時代中心の仮名表現を目指し、それを越えようとするものが多いと思う。本来の仮名に比べ、大きな作品が多く苦労しているようだが、線質は古典とは異なり現代の線である(巻物はかなり古典的)。さらに新鮮さを考え、現代的な作品として、鎌倉時代以降の仮名それらに取り組むことで、なにか新しい大字の仮名を見つけることもできる

のではないかと思うのである。

そして、現在の展示される作品の全体の印象は、学生時代や美術館勤めの初めの頃に見て感じていた作品に較べると、技術的には洗練されているように見えるが、書きすぎでどこか疲れが出ているように感じるものが多い。一所懸命に作品に取り組む姿勢は感じられるが、新鮮さを感じさせないのである。こうしたことが、他の分野でもあるのか不明であるが。

これは、書の作品作りの特色で、他の分野では、一つの作品を何十、何百と作ることはないが、書ではそれが可能で、紙一枚に一回きりで作るといった創作の仕方にも原因があるかもしれない。

今後、日展を見るにあたって書の分野の歴史を踏まえながら、さらに疲れの見えない新鮮さを感じさせる作品を見ることができるとを楽しみにしている。

名児耶 明(なごや あきら)



一九四九年北海道生まれ。  
東京教育大学(現 筑波大学)教育学部芸術学科書専攻卒業。

大東急記念文庫を経て、五島美術館学芸員。同館学芸部長、常務理事、副館長(二

〇一九年まで)を務める。

現在、東京学芸大学非常勤講師、東京藝術大学非常勤講師。せたがや文化財団理事、筆の里振興事業団理事。書文化、古筆研究者。

改組新 第七回日展

各科審査員より

小さな広がり

加藤 晋 (第一科 会員・審査員)

幼かった頃、家の周りの小さな範囲がテリトリーでした。

庭の無花果には、キイキイ鳴くゴマダラカミキリが住んでいましたし、山椒の木では、沢山のアゲハチョウを育てました。

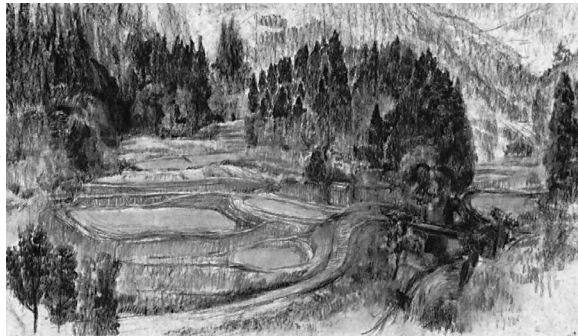
小学校の側に祀られていた古墳の裏には、小さくて、暗くひんやりとした穴が口を開けていて、怖さと好奇心の間を揺れながら、覗いたり、手を入れてみたりしました。

土手に咲く曼珠沙華に心奪われ、摘んで帰った時は「子供だけで川に行ってはいけない」と言っていた母は困った顔をして「この花の根には毒が有る」と教えてくれました。

今では、世界も行動範囲も広がり、豊かで便利になりましたが、胸躍る時は少なくなってきました。

それでも、絵の中に発見や冒険が潜んでいて、ドキドキしながら制作をしています。

この度の審査では、ワクワクする絵に出会える事を願い、楽しみにしています。



改組新 第七回日展の審査にあたって

安田敦夫 (第一科 準会員・審査員)

この度、審査員に委嘱頂きまして思うことは、出品された方が、長い時間構想を練り、日々磨き続けて来た技術で現在の自身の全てを注ぎ込んだ一枚の作品に、審査の場に向かい合う重責を、強く感じます。日展の会場で自身の作品が展示して頂けた時の喜びや、ペラペラの落選通知を受け取った時の思い起こすと、尚更のことです。

帖佐美行先生や池田満寿夫先生の講演会に伺ったことがある母からは、先生方が審査の難しさや苦しみを話されていたことを、繰り返し聞かせられました。母なりの慰めだったのだろうと思います。

出品者の皆様のお作品を審査すると言うよりは、私自身の絵画についての見識を審査される機会なのだと感じます。果たして、短い時間で

皆様の制作意図や美意識、そして、視覚芸術作品としての

魅力や、自身の趣味趣向を控え、感じ取るものが出来るのでしょうか。ただ真摯に精一杯取り組みたいです。



新しいカタチ

米田 実 (第一科 準会員・審査員)

このたび日展の審査員という大役を仰せつかり、たいへん身が引き締まる思いでおります。二十代で初入選し、三十代で特選をいただき、その間、毎年のように出展していた日展は、私にとって常に見上げるべき存在であり、大きな挑戦でした。改めて諸先生方のご指導に感謝申し上げる次第です。

日展の審査の一端を担うということは、私にとって身に余る光栄であるとともに、恐ろしさに伴う重責に他なりません。みなさまの力のこもった作品に、心眼も交えて真摯に向き合い、寄り添ってまいりたいと考えております。

新型コロナウイルスによって世界は未曾有の困難に直面し、人々の暮らしや考え方にも不可逆の変化がもたらされました。「コロナ後」の世界にあつて、いまこそ私たち芸術家はその創造力を試されているように思います。これまでも「危機」の時代に芸術は幾度となく生まれ変わり発展してきました。日展にとつても、このコロナ禍がその使命をいっそう力強く果たす好機となることを確信しつつ、私も微力を尽くして精進してまいります。





## 家族の絆

池田清明 (第二科 会員・審査員)

コロナウイルスが再燃し、その対応に社会が苦慮しています。

美術界でも秋の公募展開催について意見が分かれるなか、日展は開催の決断をしました。このような年に審査員に選ばれたからには、出来る限りの努力をして、皆様を癒し勇気付けるような日展にしなければなりません。

私は人物画を描いて出品していますが、現場写生を旨とする私の絵ではモデルの役割が重要となります。出品作品一作一作に、モデルと二人三脚で描いた様々な思い出があります。そのモデルは主に長女が担当してきました。現在彼女は夫の転勤でロサンゼルスに住まいしていますが、「母子像」のモデルのために一時帰国してくれました。



コロナの自粛生活で家族の絆が改めて見直されましたが、我が家ではずっと制作がそれを支えてきました。私事を書きましたが、皆様それぞれの思いが集結してこの苦境の時にも日展が無事開催され盛会裡に終了できる事を希つてやみません。

## コロナ禍での日展

丸山 勉 (第二科 会員・審査員)



近年日本では、社会が大きく影響を受けた「バブル崩壊」「阪神・淡路大震災」「リーマンショック」「東日本大震災」や様々な大きな災害が起こって来ました。しかし、この「コロナ禍」というのは世界中を巻き込み、救いがありません。

改組新第七回日展は、こういう状況下で「美術・絵画が社会とどのような関係性を持てるのか？」が問われる大事な展覧会になると思います。「悲壮か希望か?」「社会的な作品か否か?」というような単純な問題でなく、絵画そのものの力「人に寄り添い、支え、心の力になる」を信じています。

その為には、作者自身が自分と向き合い「何に美の価値を見出すのか?」それを作品を通じて表現し、世に問う姿勢が大事なのだろうと思います。そして、その切実な問いかけを審査で真摯に見つめる事が、自分の審査員としての務めだと考えます。

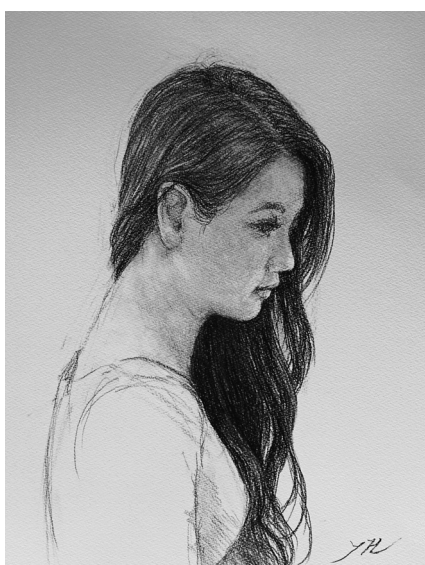
## 改組新第七回日展審査にあたって

西田陽二 (第二科 準会員・審査員)

この度、初めて日展審査員の任を承るに当たり、自分の初出品の頃の意識をお伝えしたいと思います。

私は地元で個展などの回数もこなし、それなりの作家扱いをされていたので、今更に審査などされなくてもやっていけると感じていました。東京の仲間などから誘われるまま出品し殆ど初めてに近い状態で日展を観たとき、それまで地元で数回日展に入選経験の方から聞かされていた内容や自分の知っている公募展との規模の違いに愕然としてしまいました。入選したものの会場で自分の作品を探してもなかなか見つかりませんし、ようやく見つけたときには自分の作品が見劣りしていることにガッカリしてしまいました。そこから真剣に日展に向き合い葛藤の日々の連続ではありますが、今は日展に出会えたことに感謝しています。

色々な想いのある作品審査はとても重圧に感じますが、少しでも出品者の糧となるように一生懸命努めたいと思います。



## 感謝と希望

谷口淳一（第三科 会員・審査員）

審査員を拝命すると思ひ出すことがあります。若い時、鑑査通知が届くと、恐る恐る封を開けたものでした。落選の通知をみると、「ああ長い一年がはじまる」と何度か思ったことがあります。しかしその度ごとに先輩方、友人等から励ましをもらい、今日まで続けることができました。感謝の気持ちで一杯です。

具象彫刻の道は、平坦で常に光が射しているというわけではありませんが、希望をもって歩んでいきたいと思っています。自分の手で創造できる素晴らしさは、何事にも勝るものと信じております。

少しでもいい仕事がしたいと思ひ悩んだ時、近くの六波羅蜜寺に足を運び、空也上人像を見ることがあります。念仏を唱えている一瞬の像で、空也の誠実な人間性が表れています。作者の心が感じられる作品であり、造形力と共に、いかに心で創ることが大切かを教えてくれます。今回の審査では、それぞれの作家の持ち味を生かした、心のこもった作品と出会えることを楽しみにしております。



## 心ふるえて

上田ふみ（第三科 準会員・審査員）



「心ふるえる作品がつくれているか」、恩師橋本堅太郎先生のお言葉です。

見る人の今に切り込み、心ふるわせる作品になっているか、魂があるか。自問しながら制作しているつもりが、ふと気づくと飾り物になってしまふのが常です。

私は、信州で北アルプスの山々を見て育ちました。高校・大学時代に度々訪ねた安曇野市の碌山美術館。萩原守衛（碌山）の「女」の像が、あの時の私の心に切り込んで、彫刻の道を選ばせてくれたように思います。

また、奥多摩の小さな美術館で見た犬塚勉氏の油絵。谷川岳で絵の取材中に遭難し三十八歳で逝った作者の魂が、今も絵の中の稜線を風にのって登っているかのようで、涙が溢れるほど私の心を激しくふるわせました。作品のもつ力、作品がある意義を確信しました。

見る人の心をふるわせる作品であることを意識して、審査させていただきます。

## 日展審査に寄せて

森 矢真人（第三科 準会員・審査員）

日展に出品し始めたのは大学四年の時、夜通し高速を走り上野へ向かい、とにかく無事に搬入出来た安堵感と同時に、なんとも言いようのない気持ちで帰った事を思い出します。

毎回搬入日から通知が届くまでの時間は、祈るような思いで結果を待っていました。

初入選の嬉しさ、落選の痛さ、特選の喜び。紆余曲折、二十数年が経ち今年は、思いもかけず日展審査員を拝命し、身の引き締まる思いです。

その責務の重要性を痛感致しております。

これまで支えて下さいました方々に改めて感謝しつつ、精一杯務めてまいります。

審査にあ

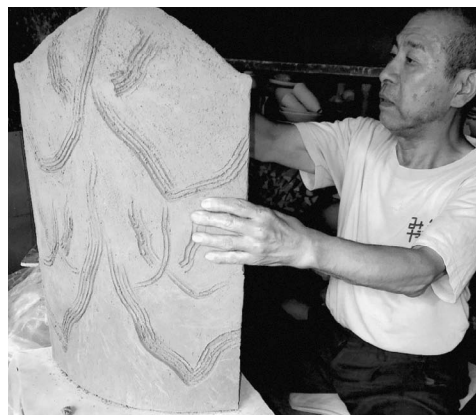
たって、出品されるひとつひとつの作品に対し真摯な姿勢をもって向き合い、作品が発する何かをしつかりと受け止めていけるよう心を澄まして鑑審査に臨みたいと思います。



## change

司辻光男（第四科 会員・審査員）

日展に出品する切っ掛けは皆さんそれぞれあると思うが、私の場合は中学三年の夏休みに知人宅で日展作品集を目にした事だった。収められていた作品群の迫力、線の美しさ、素材の持ち味を生かしたデザイン性に圧倒され、見る度私もいつか日展に出品出来るものを作りたいと思ったものだった。



初出品は二十七歳、初入選は三十歳の時で、知らせを受けた時感激で体が震えたのは今でも忘れられない思い出だ。しかしその後何回か落選し苦しい時代もあった。初入選からそろそろ半世紀が過ぎ、審査員も経験し、数々の作品に触れて来たが、今思うと転機になったのは落選した時だった。

審査員から作品を見直すチャンスを与えて貰った、これはメッセージなのだと思うことで前向きに捉え、作風を変える転機とする事が出来た。

今年は春から新型コロナ一色で、これを機会にまた社会も構造から変わっていくのだろう。でもこういう時だからこそ「change」作り（づ）ける情熱は変えず柔軟な姿勢で取り組んで欲しい。

## 創作に寄せて

村田好謙（第四科 会員・審査員）

過去に体感した感動を超える創作こそ作家の目標かと思います。産みの苦しみと創作の喜びを感じながらの達成感を求める為にも精神世界を鍛える事が必要かと思ひ、何度も早朝坐禅会に参加したり、琵琶湖へ行って波打ち際にただただ朝まで座ってみたり、広い空の下で野宿をしてみたり、日常から離れ自然の中に身を置く事で時空を越え、ちっぽけな存在の自分を感じてみたりしています。他人から見ると変わった人に写るかもしれませんが、環境を変え、五感を動かす事で創作意欲が湧いてくるのです。結局作品制作とは作品を通して自分自身を引き出す作業の様なものかも知れません。

今回、改組新第七回日展での審査をする側となりましたが、展覧会がスタートすれば今度は審査員が審査をされる側になる事を肝に銘じて、かつてワクワクドキドキしながら結果を待っていた若い頃の思いを忘れずに責務を全うしたいと思っています。



## 今を乗り越えるために

古瀬政弘（第四科 準会員・審査員）

今年は春から新型コロナウイルスの感染拡散防止のために、様々な展覧会やイベントが中止となりました。



また、人々の生活様式も変わり、自粛を求められると同時に、リモートによる会議や打ち合わせも多くなりました。従来のような対面でのコミュニケーションがとれず、自宅で過ごす時間が長くなればなるほど、人々の心身の統制に芸術文化は大きな役割を担うように感じています。

そのような状況下で、改組新第七回日展の審査員の任命を受けて、その責任の重大さを感じてしまうと共に気の引き締まる思いです。工芸とは多様な素材を手、目、耳などの身体感覚を研ぎ澄まして創作する分野である故に、作り手が今を生きていることを実感しつつ、自己と他者との往還で作品が成立していくと考えています。一人の制作者として、個々の作品の力が集結して、人々に大きな感動を与えられるような展覧会になることを期待すると共に、そのような展示になるように若輩ながら尽力していきたいと考えています。

苦境の時こそ正に真価が問われる

有岡郷崖（第五科 会員・審査員）

今年は大変な年となった。本来ならば今頃日本は五十六年ぶりとなるオリンピックに湧きかえり、スポーツはもとより我が国の文化芸術を世界に発信すべく様々なイベントが開催され盛況を博しているところのだが、突然やってきた新型コロナウィルスの世界的感染拡大によってオリンピックは延期となつてしまい、予定されていた文化芸術関係の催事も軒並延期中止に追い込まれてしまった。発表の場の大半を失ってしまった多くの作家の人達も何ともやるせない思いで日々過ごされていることだろう。

しかし反面この巣ごもり状態を好機と捉え、作家としての自己研鑽のため、平常より増加した時間を如何に有意義に活用するか、したかが作品に反映して

映して  
く  
るのでは  
と考える。

以上の

ことから

も今回展

は正に作

家の真価

が問われ

る展覧会

である

とも言

える。

多くの

意欲的作

品の出品

を期待し



改組新 第七回日展の審査にあたって

木村通子（第五科 会員・審査員）



この度、二度目の審査員を拝命し、その重責に身の引き締まる思いであります。

初審査の時を振り返りますと、気迫のこもった九千点余りの書作品を前に、審査の先生方の、「良い作品を絶対に見逃すまい」とする厳しい姿勢を目の当たりにし、必死で務めさせていだいたこと、数々の書風はあれど、完成度の高い作品は、必ず観る者に迫ってくるものがあり、訴えかける力を持つという事を肌で感じ、感動したことを思い出します。

コロナ禍で数々の書展が中止を余儀なくされる中、本年度の日展が開催されますことは、大変意義深いものがあり、必ずや、「作品を完成させる」という作家の大きな目標となり、励みとなり、力となることでしよう。

強い意思のもとで制作された一つ一つの作品は、かけがえの無いものです。初心を忘れることなく、公平公正に、心して審査に臨む所存でございます。

審査という重責

尾西正成（第五科 準会員・審査員）

この度、審査員という大役を拝命し、驚きと共にその重責を痛感しております。書を志して以来、日展を書作の鍛錬の場として、その時の自身の精一杯が投影したものを出品することを心掛けていました。同様にお考えの作家の方も多いかと存じます。

審査とは、出品者のすべてが詰まった渾身の一作を前に、その魅力を銜いしない無垢な心で感じ取り、理解して享受、時には対峙し共鳴しながら吟味を深める。それと同時に、その作品の書的な質の高さが担保されているか否かを冷静かつ客観的な眼で見極めて、総合的に判断するものではないかと考えます。

今日、作品の表現方法や自由な発想は益々多岐に広がります。その多様な書表現を審査員の皆で漏らすことなく真摯に精査することが必須であり、重責と言われる所以です。この度は心強い審査の先輩方と共に、書の今が投影されたような答えが出せるよう微力ながら審査に勤しみたいと意気込んでいます。



## 日展パートナーズについて

日展は、その前身である文部省美術展覧会（文展）の創設から今年一三三年を迎える伝統ある美術団体です。日本画、洋画、彫刻、工芸美術、書と五部門からなる日本最大規模の「日本美術展覧会」には全国から多くの美術ファンのご鑑賞を頂いております。日展は展覧会事業の他に、美術に関する調査研究事業、美術に関する講演会及び講習会事業、美術鑑賞及び創作に関する体験講座事業、美術研究冊子及び図書刊行事業等を通じて、我が国美術文化の振興発展に寄与することを目的としています。

これらの諸事業を推進するには、多くの個人の皆様並びに法人・団体の皆様からの深いご理解とご支援をいただくことが欠かせません。

日展では平成二十九年より、日展の公益事業活動に賛同し、ご支援くださる方々を対象とした賛助会員制度「日展パートナーズ」を設け、運用いたしております。皆様方には、本趣旨にご賛同いただき、温かいご支援を賜りますよう「日展パートナーズ」へのご加入を心よりお待ちしております。

日展パートナーズは、公益事業活動を財政的にサポートいただく賛助制度（寄附制度）で、個人と法人・団体を単位として募集いたします。

### （個人）

一口／年 二〇、〇〇〇円

（十口まで申し受けます）

### （法人・団体）

一口／年 一〇〇、〇〇〇円

（十口まで申し受けます）

ご寄付いただいた日展パートナーズ賛助金は、毎年開催される「日本美術展覧会」及び関連事業の助成に活用されます。

日展パートナーズにご寄付いただいた方へは、「日展パートナーズ証」が発行され、「日本美術展覧会」の鑑賞など、特典をご利用いただけます。

（詳細の問い合わせ）

日展事務局

TEL 03(3821)0453

## 賛助会員制度《日展パートナーズ》

（掲載希望者のみ 令和2年8月末現在）

### ●個人

東 晋一郎様	飯田真未様	石崎國夫様	井谷善恵様	今田功一様	岩田 薫様	大谷眞治様	奥田卓三様	梶山純子様	栗原直子様	黒田浩平様	近藤慎男様	佐川かおる様	高木京子様	田頭明子様	高田久信様	竹本大鶴様	谷本佳美様	鶴巻百合子様	中島裕子様	中原有三様	西村潤婦様	野田裕一様	堀 稲子様	松本正之様	宮島幸男様	村里 暁様
新井演子様	池田康子様	石崎喜江様	井上道守様	今村忠司様	岩村朝子様	奥田節子様	角井 博様	金子美和様	呉 祐輔様	児玉安司様	坂本美賀子様	副島 隆様	高木寛史様	田頭益美様	高橋千笑様	田中宏典様	土橋正彦様	寺岡宏高様	中田由佳様	西田俊通様	西村友子様	藤田理恵子様	松岡庸子様	宮負丁香様	宮原和朗様	森嶋順子様

### ●法人・団体

株式会社 IDホールディングス様	医療法人社団 永寿会様	株式会社 大垣共立銀行様	株式会社 加賀屋様	株式会社 川端商会様	株式会社 玉蘭堂様	謙慎書道会様	ゴールドン文具 株式会社様	株式会社 光雲堂様	株式会社 佐久間太熙堂様	株式会社 靖雅堂夏目美術店様	公益社団法人 創玄書道会様	株式会社 高山草月堂様	株式会社 筑波銀行様	T&Tパートナーズ法律事務所様	株式会社 テレビ長崎様	東洋額装 株式会社様	中川特殊鋼 株式会社様	公益社団法人 日本書芸院様	一般財団法人 ビオトピア財団様	福井素鳳堂様	株式会社 便利堂様	有限会社 丸栄堂様	有限会社 みなせ筆本舗様	株式会社 ミライト・テクノロジーズ様	一般財団法人 桃園学園様	株式会社 谷中田美術様	株式会社 湯山春峰堂様	菱三印刷 株式会社様	株式会社 リンクス様	株式会社 和光様
------------------	-------------	--------------	-----------	------------	-----------	--------	---------------	-----------	--------------	----------------	---------------	-------------	------------	-----------------	-------------	------------	-------------	---------------	-----------------	--------	-----------	-----------	--------------	--------------------	--------------	-------------	-------------	------------	------------	----------



## 作家人生—私の仕事—



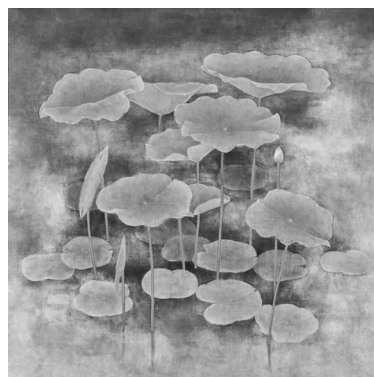
《夏草》（平成二十七年改組 第二回日展出品作）

内閣総理大臣賞



《枝垂桜》（平成二十四年第四十四回日展出品作）

《蓮池》  
（平成二十六年改組 第一回日展出品作）



1980年北京 人民大会堂前にて



## 神 髓

第一科日本画 理事 渡 辺 信 喜

京都市立美術大学（現・京都市立芸術大学）では四年生から公募展に出品できたので、風景画で挑戦したのですがダメでした。卒業制作は一転好きな花鳥画でと思い、力強い動きのある軍鶏を表現するのにペインティングナイフだけで制作しました。卒業後も同じ技法で「七面鳥」を制作し、初入選となりました。しかし翌年出品の「縞馬」はダメでした。やはり独りよがりです。迷うことがあり、画塾に入会し指導を受け、研鑽の場が必要だと思いました。師事をするなら花鳥画の山口華楊先生という思いでした。幸いなことに高校時代の恩師で晨鳥社の天野大虹先生の計らいで晨鳥社に入会することができ、作家としてのスタートとなりました。

写生の大切さの指導を受け、日本画を意識するうちに、先人が若い頃に宋・元の時代の絵画から学ばれたように、私も博物館で観た宋時代の李迪筆「紅白芙蓉図」に感銘を受けました。色紙大ながら密度ある描写が画面に緊張感を醸し出し学ぶべきところの多い好きな絵です。色々な作品を観たくて親友と台湾の故宮博物院を訪れ、感動の日々でした。その後、晨鳥社の研修旅行で山口華楊先生を始め塾員と故宮博物院を訪れました。いつかは宋元画が生まれた中国本土の旅にと憧れを抱いていました。一九八〇年に日中友好協会計らいのツアーで北京、西安、洛陽と旅行し、中国の歴史の深さを実感し、雄大な大地と風土に魅せられました。その後博物館、仏教遺跡、風景などの写生に十数回訪れていますが魅力は尽きません。

以前、ある先生に若い人達の絵はどうですかと尋ねると「ものをよくみていない」との一言でした。自分に言われているようでドキッとしました。それ以来写生の折には常に心掛けるようになりました。福田平八郎先生の言葉で「ものの神髄をつかむことに努力するのは、いつの時代でも大切な画家の道だと信じるのです。」とあります。これからも自然を良く観察して、写生を怠らず感動した対象と向かい合い制作していきたいと思えます。



《一葉》(平成17年第37回日展出品作) 内閣総理大臣賞



《霊機》(平成二十二年第四十二回日展出品作)



《満街聖人》(平成三十年改組新第五回日展出品作)

## 大転機—そして今

第五科書 会員 杭 迫 柏 樹

忘れもしません。生意気盛りだった二十七歳の春、書店で先輩の古谷蒼韻先生と……。

「この頃どうしているか。みんなよう勉強しているから、君も日展に出品したらどうだ。」

「日展なんか出しません。独学で行きます。」

「お前みたいなのをチンピラと言うんだ。日展に出品している人達がどんなに勉強しているか見に来い！」

「……。」

「せっかく来るなら、自分の書いた作品を持って、村上三島先生に紹介するから、ついて来い！」

私はその頃、「自分の眼を信じる」と大学で教えられ、独学を旨として、前衛や美学にはしつたりしながら、「伝統」という大鉾脈の偉大さに気づかず、今思えば、随分、自分勝手な習作を、古谷・山内観両先輩に導かれて、持つて伺いましたら、村上先生、「おお、君の風が出来ている。しっかりやれ。」と。

六月に入門を許され、九月に日展に出品したら、なんと入選！

村上先生は、常々「私は灯台だ。迷ったら灯台を見ろ。」と……。

以来、村上先生の巨視的なご指導と、古谷先生の「作品第一主義」の厳しい叱咤のお蔭で今日あると思うと、改めて感謝の念でいっぱいです。

さて、今の私は……。切実に思いますのは、文字の意味優先の戦前から、造型第一主義の戦後、私はそのまっ只中で成長したのですが、かつて「東洋芸術の第一」と評された書とは？と熟考しますと、「文字の意味(知性)と美的表現(感性)が融合合った、全人間性投影の稀有な芸術」であることに驚かされます。

そして、その実現こそが、自分の生きた時代の証言者であることになると信じます。

静座して、日本刀で心を澄まし、気の充ちるのを待つて筆を執る。「切れば鮮血、打てば快音」を目指して……。

## 委員会委員新人事

令和二年七月十六日開催理事会において、左記委員が選考された。

### 日展運営委員会

日本画	福田 千恵
洋画	根岸 右司
彫刻	神戸 峰男
工芸美術	武腰 敏昭
書	黒田 賢一

### 新刊行物のご案内

#### 改組新第7回日展作品集

- 定価三、〇〇〇円（税込）
  - 令和2年10月30日発行予定
  - 五部門の全会員・審査員・受賞者の作品図版
  - 別冊作家本人による作品解説、釈文（書）
  - 諸資料
  - A4判変型
  - オールカラー約一五〇頁
  - 表紙 山崎隆夫・佐藤 哲・神戸峰男・今井政之・新井光風（出品作・予定）
- ※ご注文方法等、詳細はホームページにてお知らせします。

#### 改組新第7回日展図録 （五部門五分冊）

- 定価 各三、二〇〇円（税込）
- 令和2年11月5日発行予定
- 東京会場の全陳列作品図版・目錄を収録
- （作家名・作品題名の読み仮名付）
- 全作品に作品寸法、工芸美術には技法を表記
- 審査所感、授賞理由ほか諸資料
- A4判変型

#### 第一科『日展の日本画』

オールカラー 約八〇頁  
表紙 山崎隆夫（出品作・予定）

#### 第二科『日展の洋画』

オールカラー 約一四〇頁  
表紙 佐藤 哲（出品作・予定）

#### 第三科『日展の彫刻』

オールカラー 約七〇頁  
表紙 神戸峰男（出品作・予定）

#### 第四科『日展の工芸美術』

オールカラー 約一二〇頁  
表紙 今井政之（出品作・予定）

#### 第五科『日展の書』

全会員・審査員・篆刻はカラー、準会員・無鑑査・特選・一般人選はモノクロ 約二〇〇頁  
表紙 新井光風（出品作・予定）

### 日展会館（本館）利用案内

日展会館（本館）の貸しスペースはギャラリー・会議室・教室として、ご利用いただけます。なお、新型コロナウイルス感染症対策として、利用人数制限を設けております。詳細はホームページをご覧ください。

（利用に関する問い合わせ）

公益社団法人日展 施設管理係  
電話 03(3821)9543

表紙

「驟雨来る高原」

一九六九年（昭和四十四年）

改組第一回日展

186×236cm

川崎 春彦

（二九二九〜二〇一八）

左の先生方が逝去されました。  
謹んで哀悼の意を表します。

山田 勝香先生（書・会員） 2・7・12  
江口 大象先生（書・会員） 2・9・3

### 編集後記

新型コロナウイルス感染症流行下、当日展ニュース委員会も影響を受けました。委員全員集合しての打ち合わせが出来なくなり現在事務局とはメール、FAX、電話などの手段を用いてキャッチボールしながらの編集になっています。今号では各お立場から先生方に寄稿して頂きました。日展や審査に対しての前向きで力強い思いが伝わって来ました。

会期中は考えられる最大限の感染予防対策が必須になり、また移動も不自由な状況下にあるかも知れません。過去に経験のない会場風景が展開される可能性もあります。しかしながら日展には幾度となく多難な時期を経験した歴史があります。日展を思う人達の手によりきつと良い形で乗り超えられることと思います。

最後になりましたがコロナ禍の早期終息を願いつつご自愛のほどお祈り申し上げます。（西村）

編集委員 川田 恭子 水野 収  
桑原 富一 平野 行雄  
清家 悟 堤 直美  
相武 常雄 月岡 裕二  
中村 伸夫 西村 東軒